

第5回 ようこそ考古学

川辺の弥生集落

(財)かながわ考古学財団 加藤久美

竪穴住居址群

出土した弥生土器



2009.1.9(金) 西公会堂 1号会議室

川辺の弥生集落

はじめに

近年低地遺跡の調査が増え、台地の集落とは違う発見があります。海老名市に所在する河原口坊中遺跡の調査に携わって3年目になります。相模川が中津川・小鮎川と合流する三川合流地点のすぐそばです。まだ調査は続いており、掘っただけという状態では遺跡の全体像を語ることは難しいのですが、今までの調査で発見したこと、判ってきたことを最新の調査成果から得られた弥生時代の人々の生活と川辺の営みを紹介したいと思います。

遺跡の場所と調査区について

河原口坊中遺跡は海老名市河原口 149-1、155-2 他に所在しています。海老名市の西部、JR相模線・小田急小田原線厚木駅の北西約1km、市域の西縁を南流する相模川中流域左岸です。沖積微高地という地形で現在の生活面の標高は21~22mです。私が担当する中日本高速道路株式会社による首都圏中央連絡自動車道(さがみ縦貫道路)建設事業に伴って実施している発掘調査は平成18年6月1日から開始し、現在も続いています。調査は道路橋脚部分(ピア)と排水溝・排水マスが対象になっています。ピアは1箇所が約180~250㎡と大変狭いうえ、安全対策上周囲の壁を斜めに残しながら掘削するため、深くなるほど狭くなります。河原口坊中遺跡にはもう1つ、神奈川県厚木土木事務所による河川改修事業・自転車道整備事業にともなう発掘調査も平成18年から断続的に行われています。場所は現在の堤防に沿って細長い調査区になっています。

土層堆積

台地上の遺跡との大きな違いは相模川の影響を強く受けていることです。相模川は上流にダムが出来るまではかなりの暴れ川だったと言われています。土層の堆積は河川の氾濫や洪水など水の影響を強く受けています。調査区ごとに堆積状況が異なり、特に弥生時代の確認面はシルトおよび砂質土が主体の明黄褐色土で、鉄分の沈着や水の影響で層を分けるのがたいへん難しい地区です。川から運ばれる砂が混じるためか、近世も弥生時代の土も厚く堆積しています。それとは逆に地区によっては濁流に削り取られ、本来堆積している土が無い事もあります。この遺跡では関東ローム層はみあたりません。河川の氾濫原や旧河道(古い川の跡)など通常より水の影響を強く受けていた場所では、上部に鉄分の層ができるため空気の通過を阻害して還元状態になり、青灰色に変色しています。

発見された遺構（古墳時代初頭～弥生時代）

当遺跡を代表する時代であり、検出された遺構・遺物は最も多い時代です。そのなかで特筆されるのは川と関わりの深い遺構・遺物が調査区の南北で発見されたことでしょうか。

調査区北端で旧河道（古い川跡）が検出されました。現在の地形では全く確認できなかった、埋没していた川跡です。P27 上り線では傾斜部分の上部が調査できたに過ぎませんが、P28 では斜面上部に弥生時代後期の大量の土器が出土しました。その下に中期後半の土器とともに多数の木製品が埋まっていました。木製品は高坏などの容器類、又鋤などの木製農具や斧台、火鑽臼、背負子、みかん割りの板材や杭状の加工材などがあります。また、クルミなどの種子類や昆虫のはね、鹿角、鹿の下顎骨、イノシシの歯なども出土しました。

遺跡南端のP19・20 下り線からは江戸時代の相模川の氾濫による削平が確認されましたが、その下から弥生時代の水辺の遺構が発見されました。これは西側を流れる相模川に関連した遺構と考えています。P20 下り線では板や杭で囲った水場（木槽）が作られていました。大きさは南北の長さは約1.4m、幅は約1m、床には礫が敷いてあり、木の上部から礫床までは約40cmあります。斜面下部になる西側に木槽に付随すると考えられる板と杭を組み合わせた施設があります。木槽西側の板には孔が空いており水を流したのでしょうか。長い杭や板では約80cmあり、直接打ち込んだようです。東側は木槽の板材の裏込めか、板材が二重・三重になっていました。時期は一緒に出土した遺物から弥生時代末頃と考えています。

古墳時代初頭から弥生時代中期までの集落は遺跡全体に広がっているようです。まだ正確な数は把握出来ていませんが、これまでに150軒前後を調査しています。なかでもP22 下り線ではわずか200m²強の調査区で、40を超える竪穴住居址や掘立柱建物址が重複して検出されました。同じようなところに短期間に何度も建て替えています。遺物は多数の土器とともに有鉤銅釧や小銅環などの銅製品が出土しています。この地区は他のピアと比べ遺物の量も約2倍でした。またP25 上下線の中期後半の竪穴建物址からは多くの石製品が出土しており、下り線のYH4号竪穴住居址からは砥石と複数の石斧未製品がセットで出土しています。そのほか鮫の歯のペンダントや蛇紋岩製の管玉も上り線側の竪穴住居址床面から出土しています。河川改修の調査区では小銅鐸が床面を四角く掘り込んだピットから出土しています。小銅鐸は神奈川県では3例目、市内では本郷遺跡に続いて2例目です。弥生時代後期の土器は東海地方の影響を受けており、相模川を利用した人や物の交流を想像させます。

方形周溝墓は昨年度までの調査で7基発見されました。そのうち河川改修地区の2号方形周溝墓は残存部で全長36m、溝の上端幅が8m、下端幅は2m、深さは2.5mありました。埋葬施設は発見されませんでした。弥生時代中期後半の竪穴住居址を壊していることから中期後半以降に作られたことは確実でしょう。

この遺跡を調査して最も大きな課題は相模川をどのように活用し、どの地域と交流があったのかということです。今後そのあたりを中心に探ってみたいと思っています。